様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：４２６０８
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０４１３

研究課題名（和文）１８００年前後のドイツにおける「リベラル・アーツ」

研究課題名（英文）"Liberal Arts" in Germany before 1810

研究代表者
中井　章子（Nakai, Ayako）

青山学院女子短期大学・現代教養学科・教授

研究者番号：１０１７２２５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　1800年前後の大学論・学問論を「リベラル・アーツ」の観点から分析した。取り上げたのは、カント、フィヒテ、シュライアマハー、W・フンボルト、ゲーテ、シラー、ノヴァーリスなどである。また、ドイツの研究図書館で、18世紀の大学の実状について文献調査した。
　大学史においては、1810年のベルリン大学創立が、世界の大学に影響を及ぼした画期的出来事とみなされてきたが、本研究は、それ以前の、1800年前後の大学論・学問論を取り上げ、21世紀の「リベラル・アーツ」に寄与する要素を取り出した。

研究成果の概要（英文）：German ideas on Liberal Arts at the end of the 18th century.
Although the foundation of the University of Berlin in 1810 is regarded as epoch-making, I focused my research on the German concept of the university at the end of the 18th century in order to look for new ideas about liberal arts education. I analyzed texts on the theory of the university by Kant, Fichte, Goethe, Schiller and Novalis in terms of Liberal Arts. I conclude that many aspects of their ideas were not realized in German universities in the 19th and 20th century.

研究分野：ドイツ思想、ドイツ文学、比較文化

キーワード：リベラル・アーツ　大学論・学問論　ドイツ観念論哲学　ドイツ・ロマン主義

１．研究開始当初の背景

（１）現代日本の高等教育における教養（リベラル・アーツ）教育を問う：

現代日本の高等教育において、教養（リベラル・アーツ）教育と専門教育・職業教育は、共に重要だと認められているが、両者の重点の置き方は、グローバル時代における日本社会や経済のその時々の状況に応じて、1990年代以降、シーソーのように変化している。なぜ、どのような教養（リベラル・アーツ）教育が必要か考える必要がある。

（２）21世紀における「リベラル・アーツ」理念の検討：

21世紀の日本の大学には、「教養」や「リベラル・アーツ」を名称に含む学部もあり、それぞれ理念を掲げているが、大学行政の中では、ある制度的な形式（単位取得の自由度が高いなど）を表す用語となっている。アメリカ合衆国の「リベラル・アーツ・カレッジ」がモデルになっている場合もある。21世紀の「リベラル・アーツ教育」ないし「教養教育」の「理念」についての検討はまだ不十分である。

（３）1800年前後ドイツの学問論・大学論：

1800年前後のドイツ語圏の思想家の多くが大学修了者、大学講師・教授であり、学問論や大学教育論を執筆している。これらの学問論や大学論は、従来、主として、1810年のベルリン大学創立に至る大学史の文脈において検討されてきた。

ベルリン大学創立以降のドイツの大学は、19・20世紀の日本を含む世界の大学に影響してきたが、21世紀の現代から見るとき、1800年前後のドイツ語圏の学問論・大学論には、19世紀や20世紀のドイツと世界の大学においては、実現されず、忘れ去られたため、かえって21世紀の今後に再発見すべき側面ないし要素が多々見られる。

２．研究の目的

（１）1800年前後の学問論・大学論の再検討：

1810年のベルリン大学創立以前の学問論・大学論を明らかにする。とくに、カント、フィヒテ、シュライアマハー、W・フンボルト、シェリングの学問論・大学論を検討する。

（２）1800年前後の学問体系論：

19世紀はじめの思想家は、科学がばらばらの個別的分野の集合ではなく、人間の知の全体性の中に位置づけられるものだと考えていた。ノヴァーリスの「エンツュクロペディー」構想などをとおして知の体系性の問題を考察する。いわゆる文系と理系はどのように関連付けられているか検討する。

（３）1800年前後の学問論・大学論の背景にある人間像：

学問論や大学論の背景には、人間像や社会観がある。宗教や自然との関連で人間像を明らかにし、人間の結びつきである社会の姿を検討する。

３．研究の方法

（１）思想家のテクストの分析：

カント、フィヒテ、シェリング、シュライアマハー、W・フンボルト、ゲーテ、シラー、ノヴァーリス、F・シュレーゲルなどの思想家のテクストを学問論・大学論の観点から分析する。

（２）1800年前後ドイツの大学の具体的現実を見る：

高等教育の再検討は、グローバル化した現代世界に共通の課題であり、欧米やアジアでもアクチュアルな問題となっている。近年の大学史研究の成果を取り入れ、国内・海外の研究者と意見交換する。

（３）日本の教育思想の検討：

第二次世界大戦以前の「教養」理念、戦後の教育改革の「教養」理念を、ドイツの「ビルドゥング」理念との関連で検討する。

４．研究成果

（１）啓蒙主義とロマン主義の学問論・大学論：

1800年前後の学問論・大学論においては、カントに代表される「啓蒙主義」的な大学論と、カントを踏まえつつも、それを批判的に継承しようとする「ロマン主義的」な大学論という二つの流れがある。

カントの『学部の争い』（1798年）では、世界や社会の現状に対して「理性的批判」を行う「哲学部」が、「実務家」を養成する「神学部」「法学部」「医学部」という専門学部に対抗する、重要な機能を果たすものと位置づけられる。カントの「哲学部」は、21世紀の高等教育に必要な「リベラル・アーツ」に重要な示唆を与える。批判的理性、他者の視点を理解するための「社交性」、狭い利害やしがらみを越えた意識としての「世界市民」意識、理想としての「永遠の平和」などのカント思想は、19世紀の大学では実現せず、21世紀の「リベラル・アーツ」に持ち越された課題である。

ロマン主義は、「理性」をはみ出す、感情や宗教や自然や無意識を問題とした。学問論においても、職業と結びつかない、宗教学、芸術と芸術学、狭義の自然科学よりも広い「自然学」、文学などが、視野に入ってくる。知の体系性・全体性の上に個々の専門を位置づける、「エンツュクロペディー（百科全書）」という発想が、ノヴァーリス、F・シュレーゲル、シェリング、ヘーゲルらにみられる。1800年前後のこれらの思想家にとっては、文科系と理科系の「二つの文化」（C・P・スノー）の分断はまだない。

以上に述べた啓蒙主義の学問論と初期ロマン主義の学問論は、21 世紀のリベラル・アーツという観点から再評価することができる。

（2）1800 年前後のイェーナ大学とゲーテ：
ヴァイマル公国の大学行政者としてのゲーテは、シラーやフィヒテやシェリングなどがイェーナ大学で教えるようになることに尽力した。その結果、小さな大学町であるイェーナに、1800 年前後のドイツ語圏の思想の一つの中心となる場が成立した。ドイツ独特の大学町の姿は、フランス人のスタール夫人やデンマーク人のシュテッフェンスがドイツ独特のものとして描くところである。1800 年前後の大学の状況や制度の理解は、この時代の学問論・大学論を活き活きと理解することに寄与すると思われる。
1810 年のベルリン大学創立に関わったW・フンボルトやフィヒテやシュライアマハーは、思想的中心地としてのイェーナに接点をもち、多くの理念をイェーナに集った思想家たちと共有している。ベルリン大学は 19 世紀の大学の先進的モデルとなったが、19 世紀の大学が制度化されるときに失われた要素が、1800 年前後の学問論との対比において明らかとなる。19 世紀の大学は、ナショナリズムの意識、「教養市民層」の成立、専門化などの点で、18 世紀の大学と異なっている。

（3）「人間形成（ビルドゥング）」の考えの背後にある人間観：
18 世紀ドイツ語圏の「ビルドゥング（人間形成）」という語は、日本語では「教養」と訳される。「リベラル・アーツ」も、大学制度や教育の文脈において、「教養」と訳され、理解されてきた。「ビルドゥング」や「リベラル・アーツ」や「教養」の背景には、それぞれ人間観が存在している。
ルターの宗教改革以後、ドイツ語圏は三十年戦争のような宗教が絡む争いがあり、1648 年のウェストファリア条約で、「信仰属地主義」（君主の宗教が臣民の宗教と定められる）の原則が立てられた。政府と宗教と大学は関連し、検閲制度があり、「信仰の自由」や「学問の自由」は存在しなかった。
その状況下に、「領邦教会からはみ出すキリスト教」として、「敬虔主義」と呼ばれるグループや、セバスティアン・フランク、ヴァイゲル、ヤコブ・ベーメ、エーティンガーのようなキリスト教的・哲学的思想家がいた。これらの思想家の人間観や社会観や自然観は、政府と宗教の結びつきの弱まった啓蒙主義以降の時代である、1800 年前後の思想家の人間観や社会観や自然観につながる。
19 世紀ドイツの「ビルドゥング」が「教養」として明治以降の日本で受容されたとき、16 世紀から 18 世紀のドイツ「ビルドゥング」思想の、キリスト教的要素は不十分にしか理解されなかった。
1800 年前後の「リベラル・アーツ」を再発見するためには、それ以前の宗教思想との関連を見直す必要がある。

（4）今後の課題：
「1800 年前後ドイツのリベラル・アーツ」というテーマのために、さらに取り上げるべきテクストが残っているので、それらを分析・研究したい。その上で、専門家や大学教員だけでなく、大学に関わる大学理事や大学職員、社会人、学生に読んでもらえるような著書にまとめたいと思っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
①中井章子、ゲーテと「リベラルアーツ」、青山学院女子短期大学総合文化研究所年報、査読無、第 22 号、2014 年、39-49

②中井章子、ノヴァーリスにおける「学問の球体」としてのエンツュクロペディー、Credo Ut Intelligam（「キリスト教大学の学問体系論」研究報告論集）、査読無、vol. 4、2014 年、13-20

③中井章子、パラドクスとしての福音―セバスティアン・フランク『パラドクサ』をめぐって―、青山學院女子短期大學紀要、査読無、第 66 輯、2012 年、27-38

〔学会発表〕（計　2 件）
①中井章子、ノヴァーリスにおける「学問の球体」としてのエンツュクロペディー、青山学院大学総合研究所「キリスト教大学の学問体系論」、2013 年 7 月 30 日、青山学院大学（東京都渋谷区）

②中井章子、近世自然神秘思想における「ガイスト」と「自然」、日本シェリング協会シンポジウム「自然における光と闇」、2011 年 7 月 3 日、山口大学（山口県山口市）

〔図書〕（計　3 件）
①茂牧人・西谷幸介（編）、西谷幸介、清水正、小柳敦史、中井章子、茂牧人、東方敬信、大森秀子、塩谷直也、濱崎雅孝、新教出版社、21 世紀の信と知のために―キリスト教大学の学問論、2015 年、381 頁（169-190）

②木塚隆志、中井章子（訳・解説）、南原和子、教文館、キリスト教神秘主義著作集・第 12 巻・十六世紀の神秘思想、2014 年、598+xxvii 頁（153-347、554-579)

③深澤英隆、鶴岡賀雄、渡辺優、三津間康幸星野靖二、山本伸一、比留間亮平、高橋原、柳澤田実、吉永伸一、矢内義顕、土居裕人、

高井啓介、中井章子、中村廣治郎、遠藤潤、木塚隆志、リトン、スピリチュアリティの宗教史・下巻、2012 年、510 頁（241-269）

６．研究組織
(1)研究代表者
中井　章子（NAKAI, Ayako）
青山学院女子短期大学・現代教養学科・教授
研究者番号：10172256